ぐるっと東北

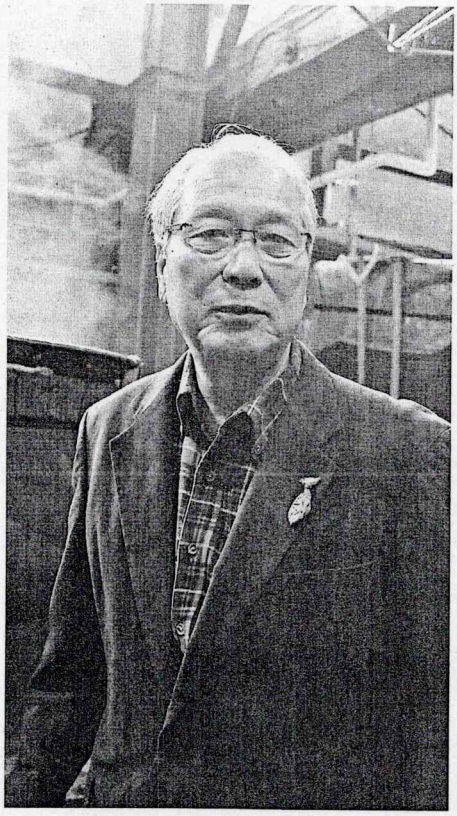
母校をたずねる

個性を否定しない校風

「月の輪酒造店」会長　横沢大造さん＝1960年度卒

岩手高 2

横沢大造さん(76)＝1960年度卒＝は、岩手県紫波町に店を構える1886年創業の「月の輪酒造店」の会長を務めています。東日本大震災当時、東北の複数の蔵元とともに「被災地のためにも花見を」と訴える動画をネットに投稿し、自粛ムードを一変させました。岩手高時代を「自由な校風で学んだことが、業界で生き抜くことに役立った」と振り返ります。【小椋治孝志】



岩手中から、中高一貫の岩手高に進学し、計6年間、男中心の青春時代を過ごしました。姉弟は姉が4人で、男は末っ子の私だけだったので、男の世界に憧れていた部分もありました。今でも学校を訪問する機会がありますが、男同士で悪さをした当時を思い出し、うれしく思います。

部活は山岳部で、八幡平や秋田駒ケ岳、早池峰山など県内の山々を巡りました。年に1回、全校生徒で岩手山に登ります。教師陣からは「手足になって引っ張れ」と発破をかけられました。標高2038㍍の岩手山登山は困難を極めます。しかし、皆を案内しなければと思うと、自然と疲れませんでした。緊張感の中、集中力を発揮すれば、体力を超えた力が出せると思いました。

校風は自由で、教師陣も個性豊かな先生たちがそろっていました。勉強や私生活で何かを強制された記憶もありません。縛られることが苦手な私には性に合っていました。

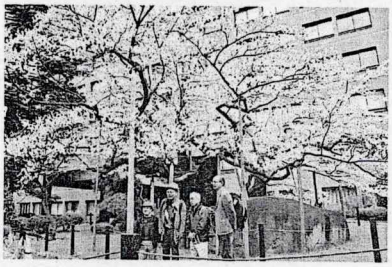
卒業から約60年経過した今でも、ある授業を思い出します。計4時間で、1枚の絵を提出する美術の授業でした。当時の私は、授業中も友人とふざけて遊んでばかりで、30分ほどで描いた目も当てられないような絵を完成させました。すると、先生から「こんな発想はなかった。素晴らしい」と激賞されたのです。何と返事をすればいいのか、困るほどでした。生徒の個性を否定しない岩手高の自由奔放な校風に感動しました。

大学卒業後は都内の大手卸売会社で修業を積みました。その後、家業の酒造店に勤務し、1980年に7代目蔵元に就任しました。よい酒を造るには、農芸化学が欠かせません。学生時代、勉強が苦手だった私は40歳近くになって、化学の本を読みあさりました。もっと勉強しておけば、と後悔しました。学校の学びは、社会に出てからも必ず役に立ちます。在校生には、よく遊び、よく学べという言葉を贈りたいです。

日本酒のピークは70年代といわれ、サワーや発泡酒も台頭し、各蔵元は非常に苦しい時代を迎えています。大手と同じことをしていたら、まともに戦えません。いかによい酒を造り、市場に入り込むか――。常に試行錯誤の毎日です。月の輪酒造店の酒は全国で販売されていますが、海外にも進出しました。美術の授業の時に言われた一言を頭の片隅に置き、誰にもまねできない酒造りを目指しています。

よこさわ・だいぞう　1942年紫波町生まれ。岩手高から国学院大に進学し、酒類などの大手卸売会社を経て、69年から月の輪酒造店に勤務。80年に同店店主、2005年に代表取締役に就任し、現在は会長職を務める。これまで県酒造組合副会長や、岩手酒類卸商業協同組合理事などの役員も歴任した。08年には、商業などの業務に精励し、模範となる人が対象の「黄綬褒章」を受章した。

シンボルの石割桜



石割桜＝盛岡市内丸で17年4月、鹿糠亜裕美撮影

岩手高のシンボルは「石割桜」だ。石割桜は盛岡市内丸9の盛岡地裁の敷地にあるエドヒガンザクラで、巨大な花崗岩の割れ目から突き出て伸びている。高さ約11㍍、樹齢は350～400年といわれ、国の天然記念物に指定されている。毎年4月中旬に花を咲かせ、観光客でにぎわう。

同校創立者の三田義正が若いころ、ねじれた根や入り組んだ節の姿から「不撓不屈」「質実剛健」という「石桜精神」をくみ取ったという。

また、校章にも岩手の岩の古字に桜花を配している。同校美術教諭で盛岡の風景を愛し描き続けた画家、小笠原哲二が考案した。校歌は詩人の土井晩翠が作詞し、「旭日におう桜花／其芽大地の深きより／出でて貫く花崗岩……」と石割桜を織り込んでいる。同窓会、図書館、学生寮も「石桜」の文字を冠している。【滝沢修】

（毎週金曜日に掲載）

卒業生「私の思い出」募集

岩手高卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。卒業年度、氏名、生年月日、職業、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部「母校」係（住所不要）へ。メールの場合はshuto@mainichi.co.jpへ。いただいた「思い出」は紙面や、毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。